

食

哲学する本棚



展示書籍を一部ご紹介

食べながら哲学する

食事をする、という基本的な生活のなかにも、考えてみると不思議なことがたくさんある。食べながら哲学してみませんか？

『りんごかもしれない』

ヨシタケシンスケ／作 ブロンズ新社

「でも、りんごじゃないのかもしれない」「もしかしたら・・・」妄想を膨らませて、果てしなく考える絵本。食卓のりんご一つで、ひとはこまで考えられる!!



美味しさって？

当たり前のことだけれど、食べ物には味がある。私が好きな味を、あなたは嫌いかもしれない。「美味しい」ってなんだろう？

『味ことばの世界』

瀬戸賢一他／著 海鳴社

プリンの味は食べてみなければ分からない？「味」を言葉で説明するのは難しいけれど、ひとはさまざまな言葉で「味」を表現してきました。



食べたり食べられたり

人間は、いろいろなお肉や野菜を食べている。反対に、食べられることは…減多にない。食べられる側から考えてみるとどうなるだろう？

『マンガで学ぶ動物倫理』

伊勢田哲治／著 化学同人

豚や鶏のような家畜は食べるのに、ペットの虐待はかわいそうに思うのはなぜ？動物と人間との倫理をマンガで考える本。



誰と、どんな風に食べるか

一人の食事はさびしい？誰かと食べるのは気詰まり？何を食べるか、よりも、誰とどんな風に食べるか、が重要かもしれない。

『食卓と家族 —家族団らんの歴史の変遷—』

表 真美／著 世界思想社

家族は本来、みんなそろって食事をするべきだ、と思っている人も多いかもしれませんが、でも、「食卓での団らん」は、最近つくられた習慣なのです。家族の食事の歴史を知るための本。



古今東西の食

世界の伝統的な食事と作法。その背景にはどんな考えがあるのだろうか？

『雲水日記 —絵で見る禅の修行生活—』

佐藤義英／作 禅文化研究所

お米をたく人はエライ人？食事も修行の一環とされる禅堂では、調理番は重要なポストだとされています。料理や食事など、禅堂生活の様子をイラストで紹介する本。



西田幾多郎は何を食べたか

哲学者でもお腹はすく。幾多郎は意外にも甘党で、お菓子や果物が好物でした。魚や蟹も好きだったようで、教え子から届く各地の産物を喜んでいます。

『寸心日記』

西田幾多郎／著 燈影舎

「渡辺君来訪 共に菓子を食ふ (明治31年2月28日)」山口高校教師時代、27才の幾多郎は同僚と多く交流し一緒に菓子を食べていたようです。哲学者の微笑ましい食生活を覗くこともできる日記です。



図書室の紹介

哲学館の1階の図書室には、哲学に初めて触れる方でも楽しく読める絵本や入門書から、本格的に勉強をしたい方のための本まで、さまざまな哲学の本が9,000冊以上並んでいます。なかには西田幾多郎が生きていた時代の古い本もあります。どなたでも閲覧できますので、気軽に入室して探索してみてください。